

東北芸術工科大学へ入学された皆さま、またご家族の皆さま、ご入学まことにおめでとうございます。この壇上には、山形の桜、早春を告げる啓翁桜が活けてあります。標準木による日本列島の桜開花前線は、今年は、3月13日に九州をスタートして、3月半ばには、この大学の兄弟校、京都造形芸術大学のある京都盆地を通過しました。西日本の日本海側では、とくに記録的な早さです。この山形では、4月15日開花、4月20日に満開という予想です。東北南部までは、平年より早い開花となりそうです。

今、京都の妙心寺退蔵院では、JR 東海の「そうだ京都行こう」のポスターになった紅しだれが、昨日の嵐にも耐えて満開です。この寺では、今、文化財の保存と若手芸術家の育成を目的とする「退蔵院方丈襖絵プロジェクト」が行われています。この退蔵院には狩野了慶による、1600年代初頭の襖絵がありますが、その損傷が激しく、普段は取り外して保管してあり、複製や白地の襖が入れてあります。退蔵院の副住職である松山大耕さんは、このやりかたでは新しい文化が生まれないと考え、400年前に各地で行われていたように、若い芸術家に挑戦の機会を与えようと、このプロジェクトを始めました。

プロジェクトに参加する絵師は公募によって村林由貴さんが選ばれました。村林さんは1986年、兵庫県生まれ、京都造形芸術大学情報デザイン学科の卒業生です。2011年の春から退蔵院絵師として、寺で生活しながら成長を続けており、その成長の様子を写真家の吉田亮人(あきひと)さんが撮影してレポートしています。また、このプロジェクトのディレクターは、京都造形芸術大学教授、美術工芸学科長の椿昇さん、技法材料指導者は、同大学美術工芸学科日本画コース教授の青木芳昭さんです。

このプロジェクトに使う襖は、障子や屏風と並んで、平安時代以来、書院造りの建築とともに発達してきた日本家屋の重要な構成要素です。襖を完成させるまでには、林の手入れから、和紙の原料である三椏や楮の栽培、布、引き手、生麩糊、筆、刷毛、絵の具、墨など多くの伝統の技が必要です。

「私の中の真理はここに在る。ここにしか無い。本当の姿は、最終的に、私から出てくる絵にしかない」  
これは、2012年5月14日、村林由貴さんの日記にある言葉です。

少しくわしくお話ししましたが、今日、この大学に入学された皆さんにも、京都にある仲間の大学から、このように挑戦する卒業生がいるという、具体的な例を知っていただいて、ぜひこのような挑戦を実行していただきたいと思うからです。

私は、皆さんが芸術に挑戦する中で、芸術とは何か、人とは何かを考え、そして私たちが生まれ出た地球のことを考えてほしいと思っています。今、京都造形芸術大学では、「春の顔見世」展覧会が行われています。その私のコーナーに展示してある1枚の絵は、犬山の霊長類研究所にいる、チンパンジーのアイが、私のために特別に描いてくれた絵です。それを見て、絵を描くとはどういうことか、人とは何か、ということ皆さんにも考えてほしいと思っており、何らかの方法でそれをお見せしたいと思っています。

霊長類研究は、ヒト科4属のうちの、ヒト以外を研究対象とする若い学問分野で、松沢哲朗さんもジェーン・グドールさんでさえ、一人のチンパンジーの生涯を、まだ観察したことがありません。その中で、この1枚の絵は、私たちに、芸術とは何かという問いかけをしています。

松沢哲朗さんは、27年間チンパンジーを見ています。少子高齢化するチンパンジーの群には、もしかしたら群そのものに寿命があるのかもしれない。そのような議論が今行われています。科学の最先端と芸術との出会いが重要です。学術研究と映像との出会いが重要であり、また、技術と芸術の出会いが重要であると、私は思っています。

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学に共通する基本理念の背景には、その土地の歴史があります。京都は 1300 年の歴史を持つ、しかも発展を続けている都市です。その背景には、隠岐から山陰を経て丹後王国に至る地域の歴史があります。その京都に京都造形芸術大学が存在します。

一方、東北の地には縄文文化の遺跡があります。例えば、押出(おんだし)遺跡です。1600 万年前に拡大してできた日本海の海流に乗って、大陸から出た舟が東北に着岸する機会は多く、山形の縄文遺跡から、大陸の遺物が出土するのは当然です。この縄文文化の山形にこの東北芸術工科大学があり、これら両大学が連携する意味が、そのような歴史にあります。

皆さんが、両大学の連携を大いに活用しながら、素晴らしい学園生活を送ってくださることを期待し、心と体の健康に留意して、いい仕事をしてくださることを願って、私のお祝いの言葉といたします。

ご入学、本当におめでとうございませう。ありがとうございました。